

【実践報告③】

新学習指導要領を踏まえた学習評価の在り方に関する研究

瀬戸市立にじの丘中学校

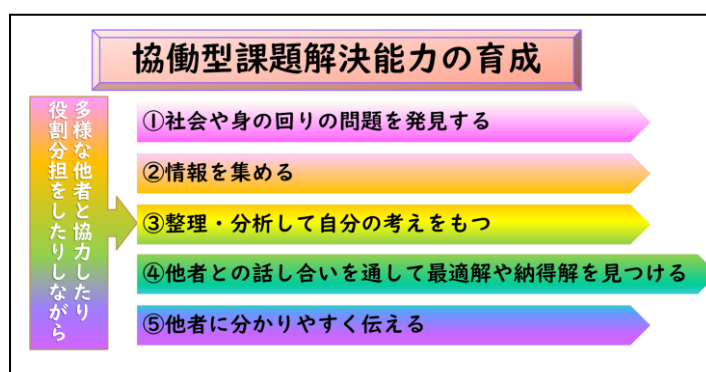
1 はじめに

本校は、瀬戸市初の小中一貫校である。教育目標は、「学び つながり 挑戦する9年間」。協働型課題解決能力（資料1）を発揮し、自分も人も大切にしながら、夢や希望をもち、その実現に向けて全力を尽くす児童生徒の育成を目指している。

本校の現職教育のテーマは、「協働型課題解決能力の育成」である。多様な他者と協力したり役割分担をしたりしながら、社会や身の回りの問題を発見し、問題の解決に必要な情報を集め、整理・分析した上で自分の考えをもち、他者との話し合いを通して最適解や納得解を見つけ、それを分かりやすく伝えることを、課題解決能力、と本校では定義している。これらの学習活動に、全ての学年、全ての教科で取り組んで

いくことで、協働型課題解決能力の育成を図ろうと、実践に取り組んだ。その際、本研究の授業マネジメントシートと振り返りシートを用いることで、効果が高まるのではないかと考え、研究に取り組んだ。以下は、3年間の研究の概要である（資料2）。

【資料1 協働型課題解決能力のイメージ】



【資料2 研究概要】

研究の内容	
1年目 令和3年度	授業マネジメントシートの活用と改良 ・評価規準を記載する ・協働型課題解決能力育成のための手だてを記載する
2年目 令和4年度	授業マネジメントシートの継続的活用 ・教科部会での活用 ・子供のつまずきや現状に合わせた展開の変更
	振り返りシートを活用した「主体的に学習に取り組む態度」の見取り ・タイミングの検討 ・項目の検討
3年目 令和5年度	さまざまな教科での授業マネジメントシートの活用 ・3年間の系統性を生かした単元構成 ・まとめを意識した単元構成
	作成された授業マネジメントシートの活用 ・子供の実態に合わせた、単元構成の再検討

2 研究の内容

(1) 授業マネジメントシートの改良

ア 評価規準の記載

授業マネジメントシートの、単元目標の下に、単元の評価規準と、教材ごとの評価規準を記載した。これによって、「指導と評価の一体化」を図った（資料3の左側）。

イ 現職教育の手だてを記載

協働型課題解決能力の育成のための手だてを、活動の欄に入れ込んだ。手だては、①「単元または授業の中で、生徒が協働し、それを実感できる場面を設定すること」、②「各単元や授業の導入において、生徒の学習に対する興味・関心、必要感、期待感を高める場面を設定すること」である（資料3の右側）。

【資料3 授業マネジメントシートの改良】

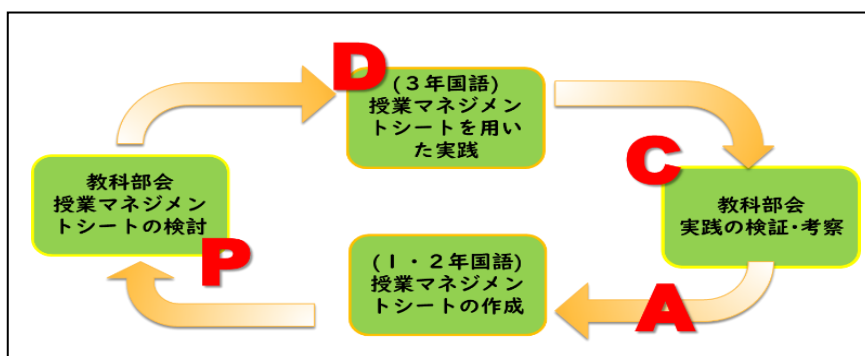
各教材の評価規準	協働型課題解決能力の育成のための手だて
<p>マネジメントシート</p> <p>○学校目標（目指す児童生徒の姿）：学び つながり 挑戦す</p> <p>○単元名 言葉とともに</p> <p>○単元の目標 表現を楽しみ、言葉の世界の奥深さを知る</p> <p>○ 単元の評価規準</p> <p>【知・技】</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解したり表現したりするために必要な語句の量を増や →俳句で使われている語句の意味を理解したり、豊かなイ 文章の種類とその特徴について理解を深めている。 →俳句の形式とその特徴について理解し、俳句を創作して 	<p>◆俳句を味わう視点を知り、鑑賞文を書く</p> <p>○前時でまとめたグループの意見を、ホワイトボードを使って発表する</p> <p>○「俳句を味わう」の中から一句を選び、2、3グループで鑑賞文を作成する。（言葉・漢字）（く）→提出</p> <p style="border: 2px solid red; padding: 5px;">ア. 情報を収集・精選したり、的確な言葉選ひたりして、協働して鑑賞文を完成させる。 イ. それぞれの俳句について、各グループで作った鑑賞文から、読み方を知ったり知識を得たりすを伝える。</p> <p>◆鑑賞文を相互評価し、自分の鑑賞文に生</p>

本校現職教育の実践に取り組み始めてすぐに二つの点において単元構成の重要性に気付いた。一点目は、評価である。協働させることが目的になり目指す生徒の姿を見失っては本末転倒である。評価規準に則った望ましい生徒の姿をイメージし、そのための学習活動と考へ、単元を組み立てることが重要であると感じた。二点目は、協働が効果的に生きる単元構成である。単元全体を見渡せる授業マネジメントシートの利点を生かせば、手だてのタイミングや内容の有効性が検討できると考えた。

はじめに、3年生国語科で、改良した授業マネジメントシートを用いて実践を行った。その後、国語科教科部会での考察を経て、1・2年生でも単元構成に取り組んだ。作成した授業マネジメントシートを用いて、手だてが効果的に生きる単元の組み立てであるか、評価の内容と取り方が妥当であるかを検討し、実践後に検証・

【資料4 授業マネジメントシートの利用によるPDCAサイクル】

考察をする、PDCAサイクル（資料4）のスタイルが、ここでできあがったように感じている。また、単元構成の全体像が捉えやすくなり、手だてをより効果的に打つことができた。



(2) 作成されたシートの活用

令和5年度、1年生時より3年間教科担当を務めた教員が、生徒のこれまでの学習内容や到達度を踏まえ、授業マネジメントシートを作成し直した。ベースとしたのは、前年度に別の生徒を対象として、別の教員が作成した授業マネジメントシートである。前年度、2・3時間目として、一括して記載していた授業内容を1時間ずつに分け、学習活動とめあてを細かく生徒に示した。授業者はこの変更によって、生徒の理解度は高まったと感じていた。また、前年度の最終11時間目の反省に、「何をすればよいのか、最後までつかみきれていない生徒が目立った」という記述があったため、本年度は6時間目に、「人物評を書く上で、必要な情報について考える」という1時間を入れ、単元構成を変更した。「人物評」という言葉に身構えていた生徒も、そのために必要な過程を確認でき、自分の考えをもって、書く活動に取り組む姿が見られた。写真は、授業の様子である。



協働学習し合う生徒

(3) 振り返りシート

振り返りシートの実践を進める上で、タイミングや、どういった内容で振り返るかを検討する必要があると感じた。

ア タイミング

効果的に振り返りを行えるタイミングを探るため、次のような実践を行った。

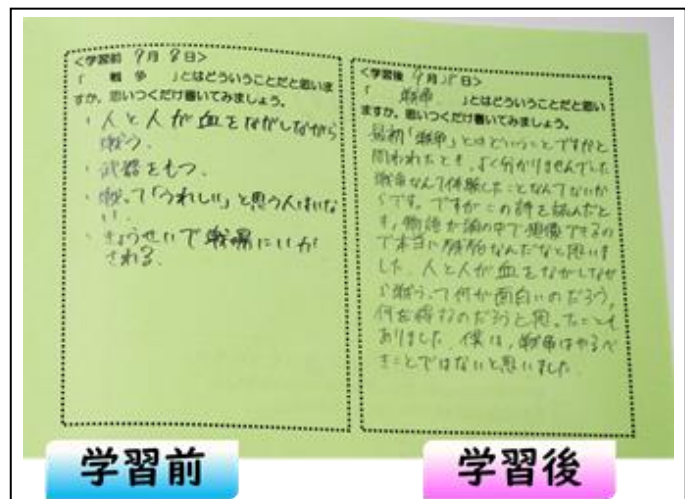
(ア) 毎時間振り返る

毎時間記入する方法では、授業の時間が必ず5～10分程度必要となるため、時間の確保が授業者の負担になると感じた。一方で、生徒が自分自身の学びの足跡を残し、自己調整を図ることができるというよさも感じられた。教員側としては、形成的な評価の見取りがしやすくなり、その後の授業展開の再構成に役立てることができるというメリットがあると言える。

(イ) 学習前後やめあてごとに振り返る

めあてごとの振り返りは、毎時間のものに比べて、生徒だけでなく、教員側も目指すべきものが見えやすくなり、総括的な評価の見取りにつながると感じた。また、「学習前」「学習後」を比較すると、全員書く分量が増えていた(資料5)。内容は、授業を通して得た知識や考えたことに留まっている記述も多かったが、見た目でも「学習が深まった」という感覚を生徒自身がもつことも、主体性を育てる上で大変重要なことだと思われる。

【資料5 学習前後での振り返り】



イ 振り返りの項目

(ア) めあてを振り返る

めあてをそのまま振り返り項目とし、めあてごとに振り返らせた。「夏草—『おくのほそ道』から」の単元では、次のように三つのめあてを設定した。①と②は1時間ずつ、③は、単元のヤマ場を含む3時間のまとまりとしてのめあてである。

- | |
|-------------------|
| ①作品の背景をつかもう |
| ②表現に着目し、学習課題をつかもう |
| ③表現から作者の考えをつかもう |

資料6に示す生徒は、②のめあてに対する振り返りに「作者の独特な表現に着目でき、調べてみたいなと思いました」と書いている。ここからは、この生徒が教材である詩の表現に着目して、自分の課題を意識していることがうかがえる。③のめあてに対しては、ヤマ場を含めた3時間を終えての振り返りとして、「詩は難しい表現があるけれど、文の一つ一つの意味を理解すると、とても面白い詩だなと思いました」とあり、評価規準の「言葉がもつ価値を認識している」と捉えることができる。これらの比較から、②よりも③の方が、振り返りの内容に、質の高まりが感じられ、めあてを振り返りの項目とすることで、学習内容をひとまとまりに捉えさせることができ、効果的であったと感じた。

【資料6 振り返りの質の高まり】

②表現に着目し、学習課題をつかもう(第2時)
→ 作者の独特な表現に着目でき、調べてみたいなと思いました。

③表現から作者の考えをつかもう(第3～5時)
→ 詩は難しい表現があるけれど、文のひとつひとつの意味を理解すると、とても面白い詩だなと思いました。

(イ) 授業展開に合わせて振り返る

「故郷」の単元では、キーパーソンである三人の人物について捉え、人物同士の関係、それらが象徴していることを掴み、主題の読み取りへとつなげるという単元構成とした。振り返りの項目は、それに合わせたものとした。

初読後に、三人の人物について自分がどう感じるかを記入させ、学習後に再度、同じ三人について、自分の考えを記入させた。抽出生徒は、学習前、主人公である「私」に対して、「かわいそう」「まじめ」といった印象にとどまっていた。

学習後の振り返りでは、人物への考えが、「歩く人が多くなれば、それが道になる」という本文を根拠とし、「人としてすごい」という人物評へと変化した。

(ウ) 自分の変化を振り返る

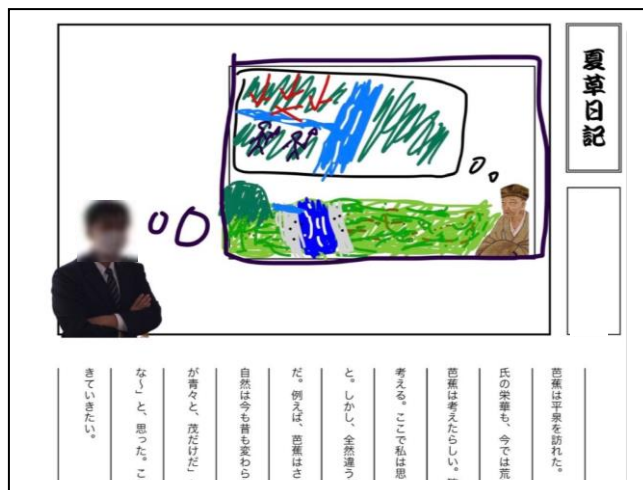
「夏草—『おくのほそ道』から」では、生徒は「なぜ古典を学ぶのか」というテーマについて話し合っ、て、クラスの課題を設定した。そして、「何ができたら『夏草』を読み取ることができたことになるか」という確認方法を決めた。

クラスで決めた課題をクリアするために、生徒が方法を探り、自己調整しながら、粘り強く取り組めるかを見取ることができると考え、単元を構成した。そして、自分自身の考えの変容を振り返ることで、「主体的に学習に取り組む態度」を見とれるのではないかと考えた。

あるクラスは、課題を「その時代の背景や考え方、価値観を知り、自分の考えや知識を深め、今の

自分に生かして、大人の階段をのぼる」と設定した。そして、松尾芭蕉になりきって、「絵日記・夏草日記」（資料7）を作成するという確認方法に決め、活動に取り組んだ。ある生徒は、自分の変化について、「松尾芭蕉は私に新しい価値観を教えてくれた」と表現した。また、別の生徒は、「自分の言葉で表すことができるようになった」と書き、二人とも自分なりに変化を感じていることが分かる。

【資料7 生徒が作成した「絵日記・夏草日記」】



3 成果と課題

3年間の実践を通して、授業マネジメントシートの有効性を強く感じた。学びの在り方が問い直されている今、評価に対して、不安を感じている教員は少なくない。だからこそ、「指導と評価の一体化」がなされた授業の必要性を、日々痛感している。授業マネジメントシートを用いる最大のメリットは、妥当性のある評価につながることである。どこでどのような指導と評価が必要なのか、その適切なタイミングが把握しやすくなる。形成的な評価と総括的な評価を明確にすることによって、目標に向けて生徒を導くことができ、生徒の主体性を育てることもつながった。さらに、さまざまな教科・学年で授業マネジメントシートを活用したことで、教科の特性と呼ばれるような内容にも、対応できると感じた。以上のことから、授業マネジメントシートは、追究したいことに合わせて活用できると言える。

また、「主体的に学習に取り組む態度」を見取るために、振り返りシートは有効だと感じた。ただ、どのタイミングで振り返らせるか、教材やめあてに応じて変える必要がある。これは、振り返りの項目にも言えることである。振り返りシートは、教師の見取りのためだけではなく、生徒の主体性を育てるという側面もあると感じた。単元構成の中で、教師が意図的に、主体性を育てる仕掛けを用意し、それを受ける形での振り返りであれば、より効果的であると感じた。そういった点でも、授業マネジメントシートと振り返りシートをあわせて活用していくことが有効であると考えられる。

今後は、この3年間で作成した授業マネジメントシートや、振り返りシートを広く共有する方法を探っていく必要がある。共有し、引き継いでいくことによって、授業マネジメントシートをより洗練させ、財産として蓄積していきたい。